

西郷隆盛の肖像画と込められた想い

通信制課程教頭 吉満庄司

はじめに

平成30年は明治維新150周年、そしてNHK大河ドラマ「西郷どん」の放送もあり、改めて西郷隆盛が注目された年だった。西郷隆盛の知名度、人気は没後140年以上経た今日でもおとろえることなく、鹿児島県明治維新150周年推進室が企画した「西郷1(せごワン)グランプリ」には、全国から232人も西郷どんのそっくりさんのエントリーがあった。全国Web予選を通過した10人と鹿児島地方大会を通過した5人が鹿児島中央駅のアミュ広場に集結して行われた決勝大会には県内外から大勢の観客が集まり、その様子はテレビのワイドショーなどで全国に放送された。

鹿児島県では、明治維新150周年記念に当たり、秋篠宮同妃両殿下をお迎えして開催した「明治150年記念式典」をはじめ、県下各地で開催した「記念シンポジウム」、次世代を担う青少年をメインにした「維新未来博」など、様々なイベントを展開した。

また、『明治維新と郷土の人々』の刊行や、県下各地の小学校で地域の明治維新を楽しく学ぶ「維新の学びキャラバン」、高校生による「歴史テーマ研究発表」、若手による明治維新研究に対する「若手研究者育成事業」など、教育・学術面でも画期的な事業を数多く展開した。

各事業が高い評価を受けたが、テレビや新聞、そしてSNSで全国に最も発信され、反応が大きかったのは、やはり「西郷1グランプリ」であった。



「西郷1グランプリポスター」

デザイン：野村昌司（明治維新150周年推進室）

モデル：[セター]竹原勇輝（いちき串木野市観光案内所）
[バック]藏ヶ崎島良祐（かごしまPR課）



1 西郷隆盛の容姿と人柄

西郷隆盛と同時代に生き、実際に面識のある人は、西郷がどのような顔をしており、どんな人柄であったかは当然よく知っていた。ところが、後世に生きる我々は、写真を一枚も残さなかった西郷の顔や姿をイメージするには、肖像画に頼るしかない。「あの人は西郷さんにそっくりだ。」という時の西郷さんは、肖像画で見る西郷隆盛なのである。

一方、西郷の人格や思想については、手紙や漢詩、揮毫などが多く残されているため、そこから探ることが可能である。最たるものは、旧庄内藩士が西郷の言行をまとめた「西郷南洲翁遺訓」であろう。その他、各地に残されているエピソードなども、西郷の人柄を知るための貴重な資料となり得る。

こうしたものから見えてくる西郷の特徴的な容姿は、でっぷりとした体型に坊主頭、濃く太い眉毛、大きな眼。人柄については、豪快でおおらか、ユーモアに富み、小さなことにこだわらない、誰にでも寛容。そして、誰からも愛され親しまれる。このような特徴を備えた人物こそ「現代の西郷さん」と呼ぶに値する条件と言えよう。そして、何よりも西郷隆盛を尊敬し、西郷隆盛のような器の大きな人物になりたいと、日頃から人格の向上に努めていることが大事な要素である。

今、我が開陽高等学校の職員をそのような視点から見渡してみると、通信制課程では事務室のU氏、全日制課程では保健体育科のS氏などの顔が浮かぶが、いかがだろうか。

2 キヨソネの描く西郷隆盛肖像画

西郷隆盛の肖像画で最も有名なのはイタリア人のキヨソネによって描かれたもので、多くの人が西郷さんと聞いてまず思い浮かべるのがこの絵ではないだろうか。その他、多くの画家によって西郷隆盛の肖像画が描かれてきた。それは、単に西郷隆盛の功績の大きさだけでなく、人格や人柄を慕う人々の気持ちが反映されているのかもしれない。

本稿では、西郷隆盛を描いた代表的な肖像画を紹介するとともに、描いた画家と彼らの西郷さんに対する想いについても推測してみたい。

【キヨソネ】

エドアルド・キヨソネ (Eduardo Chiosso, 1833年 - 1898年) は、イタリアのジェノバ出身の版画家・画家で、キヨッソーネと表記されることもある。

明治8年、大蔵省紙幣局に招聘され来日した、いわゆるお雇い外国人である。同局に16年間奉職し、銀行券や印紙のデザインおよび原版作りを行い、後進に銅版技術の指導をした。

この肖像が描かれたのは明治16年で、大蔵省の初代印刷局長であった得能良介の依頼によるものであった。得能は、娘の清子が西郷従道に嫁いているため西郷の親族でもあり、明治維新前から西郷と親交が深かった。その得能が、西郷の肖像が伝わらないことを遺憾として、キヨソネに肖像画の制作を懇願したのである。

キヨソネは、西郷の死後來日しているのに、当然本人を目の前にして肖像画を描くことはできなかった。西郷本人と面識がないうえに、西郷には写真も残っていないので、西郷の弟である西郷従道と西郷



「キヨソネ筆西郷隆盛肖像画」
鹿児島県歴史資料センター黎明館提供

の従兄弟に当たる大山巖をモデルにしてイメージを作り上げた。具体的には、従道の上半分と大山の下半分をモンタージュしたのである。

そのことを根拠に、「西郷さんはこんな顔ではなかった。」という意見もあることは事実である。しかし、単純に弟と従兄弟の顔をくっつけて完成させたわけではなく、西郷の親族や旧知の人物からアドバイスをもらいながら作成していったのである。そうした人々の記憶も加味されており、完成した肖像画を見た親族は、「これこそ翁（西郷隆盛）そのもの」と太鼓判を押している。

コンテ（カーボンチョーク）で描かれたこの肖像画は、精緻な筆致で極めて写実的な作品のため、しばしば写真ではないかと勘違いされるほどである。そして、時期的にも西郷の没後最も早く描かれたこともあり、その後多くの画家によって描かれた西郷の肖像画に大きな影響を与えた。

なお、完成した作品は西郷家に贈られたが、残念ながら太平洋戦争中の東京空襲で実物は焼失してしまい、現存しない。我々が目にしているものは戦前に撮影した写真を焼き直したものである。

3 実際に西郷隆盛に接した画家による肖像画

西郷隆盛との面識のないまま肖像画を描いたキヨソネに対し、西郷と面識のある鹿児島出身の画家や、あるいはプロの画家ではないものの自分が見た西郷の容姿を後世に残そうと肖像画を描いた人も存在する。ここでは、実際に西郷に接したことのある人々が描いた西郷隆盛肖像画を紹介する。

【床次正精】

床次正精（とこなみ まさよし、1842年 - 1897年）は、宮之城島津家に仕える児玉家に生まれ、床次家の養子となる。7歳で日本画（狩野派）の能勢一清の弟子になり日本画を学び始めた。その後、長崎で見た油絵の写実性に驚き、以降独学で洋画を学んだ。客観的な写実性こそが洋画の本質と理解し、以後の自らの画風としたという。

明治5年に司法省に入り検事補、同10年に宮城県上等裁判所検事、翌11年に東京地方裁判所検事を歴任するが、明治13年には裁判所を辞め画業に専念した。

この肖像画は明治20年頃の作品とされ、自分が西郷に会った記憶を頼りに何十枚も下絵を描き、それを西郷従道や黒田清隆、三島通庸など西郷隆盛に近いところにいる人々に見せて意見を聞き修正を加え完成させたという。キヨソネの肖像画の影響を受けてはいるものの、西郷の顔を実際に知っている画家が描いた初めての肖像画ということで貴重である。

鹿児島出身の洋画家の黒田清輝は、自らまとめた床次正精の伝記に、「老西郷の肖像は、君の最も苦心の作品で、明治20年の夏に着手せられて、山下房親君の意見を聴き幾度となく修正を加えて、出来上がったのだ。実に記憶を基礎として、此れ程に作り上げる事の難しさ加減は思いやられる。今日南洲翁の面影を見ることの出来るのは、全く君の賜である。」と記している。

本作品は、181cm×103.5cm という大作であり、軍服姿で描かれた西郷隆盛は、眼光鋭く威風堂々としており見る者を圧倒する。一方で、作品全体にえもいわれぬユーモアが感じられ、そのあたりも西郷の真の姿を表しているのかもしれない。実際に接したことのある画家の真骨頂であろう。



「床次正精筆西郷隆盛肖像画」
鹿児島市立美術館蔵

【服部英龍】

服部英龍（はっとり えいりゅう、1843年 - 1905年）は国分郷の郷士で、本名は有馬貞英とされるが、『日当山温泉西郷南洲翁逸話』には服部喜右衛門とある。長兄の服部喜之丞貞雄及び次兄の服部喜三次喜寿ともに西南戦争に従軍したにもかかわらず、当時35歳であった英龍は従軍していないことを考えると、有馬家に養子に出されたのかもしれない。

西郷隆盛は、しばしば湯治のため日当山を訪れており、英龍はその際に西郷の姿に接している。一説には、湯治中の西郷をのぞき見（観察）してスパイに間違えられて捕らえられたが、やがて事情が分かると、西郷は英龍を招き入れて肖像画を描かせたという。しかし、西郷研究家の故山田尚二氏が指摘するように、写真嫌いの西郷が生前に肖像画を描かせたとは考えづらい。今日伝わる西郷の肖像画はすべて西郷の死後のものである（「西郷の狩姿を描いた服部英龍」、『西郷隆盛全集』月報4）。

さらに、同氏は「英龍は日本画、中でも美人画を得意としたため、西郷の顔も唇、鼻の線、頬のふくらみ、目周辺の着色にその影響が濃厚に見られる。美人画を眉太く、あごひげ濃く密にして大量生産したとあってよい。英龍の西郷像は以上の観点から見れば、一応野性的西郷を描いているようであるが、本質は面長の女形である。」と分析している。

服部の描いた西郷隆盛肖像画は20～30枚は現存するといわれるが、大別すると猟犬を連れた狩姿と手に正三位の手旗を持った正装軍服姿に分類される。きちんとした区分はないが、後者は西郷が復権した明治22年以降に描くようになったものと思われる。

【石川静正】

石川静正（いしかわ しずまさ、1848年 - 1925年）は、旧庄内藩士で、明治3年と明治8年に鹿児島に赴き、西郷に面会している。安藤英男『西郷隆盛』（学陽書房）によると、「もと庄内藩士族の石川静正が、明治3年11月鹿児島に練兵修行に赴き8年4月にも再訪し、西郷の風容に接した。この時の印象をもとに年月をかけ隆盛の肖像を描いた。これを見た薩摩出の洋画の巨匠黒田清輝が、肖像画家として令名の高かった門弟佐藤均に勧め、苦心の上、大正2年に完成したのが此の肖像。隆盛夫人、遺子などの鑑定により、真に迫る一品といわれる。」とされる。

庄内藩は、鳥羽・伏見の戦いの引き金となった江戸の薩摩藩邸焼き討ち事件の中心だったにも拘らず、降伏後は西郷の指示で寛大な処置で済んだということはよく知られている。明治に入ると、旧庄内藩主である酒井忠篤自ら大勢の旧藩士



「服部英龍筆西郷隆盛肖像画」(上下とも)
鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵



たちを引き連れ、鹿児島県の西郷のもとを訪ねた。西郷は誠実に丁重に対応し、旧薩摩藩士以外の入学は許されなかった私学校にも、特別に庄内藩の旧藩士だけは入学を認めたという。

明治10年の西南戦争の際、当時私学校で学んでいた伴兼之と榊原政治の2名の旧庄内藩士は、帰郷の勧めを断り、西郷と運命を共にする従軍を志願し戦死した。

明治22年に大日本帝国憲法の発布に伴い、西郷隆盛の賊名が取り消され正三位の位が贈られると、旧藩主忠篤や旧家老の菅実秀らが中心となって「南洲翁遺訓」を編集・発刊し、旧藩士たちが全国各地を行脚して西郷の教えを広めた。

そのような西郷を慕い、実際に鹿児島で西郷の知己を得た旧庄内藩士の石川静正が、西郷没後30年の慰霊祭で掲げるために描いたこの肖像画は、単なる絵画作品としてではなく、礼拝の対象としての神像に相当する画を目指したものと思われる。したがって、この肖像画は石川静正が実際に目にした西郷隆盛の姿だけでなく、旧藩主酒井忠篤をはじめ庄内の人々の西郷への思慕の念が込められていると言っても過言ではない。当然ながら、そこに描かれる西郷の表情は温和で優しげで、慈愛に満ちたものとなっている。

本肖像画は、長い間石川家が所蔵していたが、平成15年に鹿児島県歴史資料センター黎明館で開催された開館20周年記念特別展『激動の明治維新』に特別出品され、鹿児島で初めて実物がお披露目された。

なお、この絵を見た黒田清輝が門弟で肖像画家として令名の高かった佐藤均に勧め、佐藤が石川の肖像画を基に描いた油絵が2点存在し、1点は庄内の致道博物館（大正2年作）に、もう1点は尚古集成館（大正10年作）に収蔵されている。

【肥後直熊】

肥後直熊（ひご なおくま、1866年 - 没年不詳）は、西郷屋敷の隣家に生まれ、幼少の時分にはいつも西郷に「直坊、直坊」と可愛がられ膝の上で遊んだという。成人後は西郷への崇敬の念がますます強まり、西郷の肖像画を描くようになった。

昭和2年に西郷没後50年祭を迎えるに当たり、西郷菊次郎をはじめ西郷家の親戚に見せたところ、公表を勧められたので、関係者の意見を加えて公表することとした。その結果、西郷の末弟小兵衛の未亡人である松子夫人に「これまで多く肖像があるが、これは生前の温容を最もよく写したもので、あたかも隆盛さあを眼前に見るようである。」と激賞されるほど好評を博したという。本作品は、実際に西郷本人と面識のある人の描いた最後の西郷隆盛肖像画となる。

右に紹介した肖像画は鹿児島県歴史資料センター黎明館が所蔵しているものだが、同じ構図の作品が西郷南洲顕彰館にも収蔵されている。

「肥後直熊筆西郷隆盛肖像画」
鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵



「石川静正筆西郷隆盛肖像画」
個人蔵、鹿児島県歴史資料センター黎明館保管



両者はよく見なければ区別がつかないが、前者の方が顔の表情が柔和で、ユーモラスな印象さえ持つ。おそらく何枚か描いたものと思われるが、この絵が有名になったのは、同種のものが石版刷りとなって広く頒布されたためである。

なお、本肖像画の下部には、制作の経緯が直熊の自筆で記されている。全文を掲載しておく。

不肖直熊幸於武村西郷家之隣家，翁嘗呼直坊直坊寵愛，及長景仰之念益深，常以写翁之肖像爲樂，古人有言日，已是夢中夢，更逢身外身豈能可謂写其人形容矣，然余稟性之愚，焉能得写其心胸面目如何之状乎，但写所存于記記憶之大体，以教傳之于子孫，深秘於篋底而未嘗示人也，不圖爲先輩之所知日，會五十年之弔辰，蓋公諸世，及謀之於令子菊次郎氏，菊次郎氏亦曰，宜從先輩之說而公諸世，於是不肖直熊自不実度欲公諸世，頃日纔得写之，既而翁令弟小兵衛未亡人松子見之驚曰，豈如親見於阿翁，所謂非逢身外身者乎，雖世多肖像出此右者蓋少焉，激賞不敢當，但以其所存記憶之大体，與平日所聞之言更互演繹而写之，苟得庶幾萬一則平生之願足矣，欲一以報翁寵愛之恩，一以答先輩之言，非敢有他志，謹記事實之梗概，以告見者云爾，

昭和二年一月十日

肥後直熊謹誌

4 西郷と面識のない画家の描いた肖像画

西郷隆盛の没後50年に当たる昭和2年には、鹿児島では西郷を顕彰する大きな動きがあり、城山の麓の鹿児島市立美術館横の西郷隆盛銅像が建立されたのもこの時である。そうした盛り上がりの中で、西郷の肖像画も様々な画家によって描かれた。没後50年が経つとはいえ、西郷に面識のある古老もまだ存在した時代である。

【大牟礼南塘】

大牟礼南塘（おおむれ なんとう、1876年-1935年）は、種子島の西之表出身。中学造士館卒業後、上京して東京美術学校西洋画科に入学。黒田清輝に師事した後、明治33年に卒業して鹿児島県に戻り、鹿児島市の西本願寺前にアトリエを開設する。鹿児島最古の洋画団体「青蛙会」を結成するなど活躍し、鹿児島洋画壇の祖といわれている。本名は時艾（ときはる）といい、大牟礼南島とも表記される。

明治44年から昭和5年まで約20年間にわたり鹿児島県立第二鹿児島中学校（旧制）で美術教員を務め、城山の麓に建つ西郷隆盛銅像を制作する安藤照をはじめ多くの後進を指導した。

昭和2年、西郷隆盛の五十年祭を迎えるにあたり、南塘は西郷肖像画の制作を依頼された。南塘は西郷の庶長子である西郷菊次郎と、西南戦争に従軍した経験を持つ家村助太郎の指導を受けて、西郷の風貌を研究した。モデルには西郷菊次郎の嫡子で西郷に似ているということで評判だった西郷隆治を選んだ。隆治は安藤照の西郷銅像のモデルにもなっており、県立二中出身であるので、南塘の教え子でもあった。

南塘の描いた肖像画は墨絵であり、紋付羽織の折目正しい西郷像であった。掛軸に表装された肖像の上部には、当時の海軍大臣財部彪の筆による「猛虎一声山月高し」の讃が揮毫されている。本作品は長い間、大牟礼家に所蔵されていたが、現在は鹿児島県歴史資料センター黎明館に収蔵されている。

南塘は油絵の西郷像も描いており、東郷平八郎や西郷家に披露したところ、「さながら生ける南洲翁を見る様」と好評を得たという。



「大牟礼南塘筆西郷隆盛肖像画」
鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵

【時任鵬熊】

時任鵬熊（ときとう わしぐま、1876年 - 1932年）は、始良郡横川町に生まれ、菱刈町の時任家の養子に入った。明治29年鹿児島尋常師範学校を卒業後、1年ほど横川高等小学校で教鞭を執った後、上京する。東京溜池の白馬会研究所を経て、明治31年に東京美術学校西洋画科に入学し、黒田清輝の指導を受ける。卒業後は郷里に帰り、中央画壇との縁は切れるが、南国美術展など郷土画壇で活躍した。

通常、着物姿で描かれる西郷像は、服部英龍や石川静正の作品に見られるように、温和で穏やかな印象を受けることが多い。しかし、鵬熊の描く西郷像は眼光鋭く、あたかも軍服を着ているごとく厳めしい風貌をしている。明治維新という大業を成し遂げた人物として表現したのであろう。

本作品の制作年代は不明だが、鹿児島県歴史資料センター黎明館の元学芸課長の山下廣幸氏は、「大牟礼南島の作品などが、南洲翁の没後五十年祭を記念して描かれたのと時を同じにし、昭和2年頃の作品ではないか」としている。



「時任鵬熊筆西郷隆盛肖像画」

鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵

5 キヨソネの影響を受けていない肖像画

これまで見てきた西郷隆盛の肖像画は、いずれも大なり小なりキヨソネの描いた肖像画の影響を受けているといわれている。ところが、次に紹介する2人の描いた肖像画は、キヨソネの絵とは全く別系統で、その影響を受けていない。瀬尾鶴汀は西郷本人と何度も会ったことがある薩摩藩を代表する画家であり、平野五岳は西郷に面会したという確証はないものの、西郷を崇敬し西南戦争直前に鹿児島を訪れたことのある大分県日田の文人画家である。

【瀬尾鶴汀】

瀬尾鶴汀（せのお かくてい、不明 - 1914年）は、瀬尾覚左衛門といい、大坂詰の薩摩藩士であった。西郷隆盛の絵画の師匠とも伝わっており、当然、何度も西郷に会ったことのある。専門の画家で西郷をよく知る専門の画家が描いた肖像画という点で、極めて重要な作品といえよう。

キヨソネとその影響を受けた作品と異なるのは、目と眉毛である。目はどちらかというといく細い方で、眉毛も濃く描かれてはいるものの、決して太くはない。その他は、体格といい顔の輪郭といい、よく知られている西郷像に共通している。

絵の横に「西郷南洲先生真像 明治九年秋先生エ別ル比之像」と記されている。明治9年の秋という具体的な時期が記されているものの、西郷と別れた最後が明治9年の秋ということで、その時の姿を後年描いたと理解できよう。そして、わざわざ「真像」と記しているのは、巷に流布している西郷の肖像画は真の姿を表しておらず、西郷をよく知る自分が描いたこの絵こそ真の西郷の姿を表しているのだということを強調したかったと考えられるのではないだろうか。



「瀬尾鶴汀筆西郷隆盛肖像画」

鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵

【平野五岳】

平野五岳（ひらの ごがく、1809年-1893年）は大分県日田の生まれで、真宗大谷派専念寺の住職を務めた文人画家。広瀬淡窓の咸宜園に学び漢詩を得意とし、絵画は独学ながら田能村竹田の筆法に倣い、書道は日下部鳴鶴などと交流があり、詩・書・画に秀でて「三絶僧」と称された。日田地方では、昔から「五岳上人さま」を呼ばれており、尊敬と人気を集めている人物である。

五岳は、西南戦争勃発直前の明治9年11月、東本願寺鹿児島別院の開院式参列のため、鹿児島を訪れた。そのため、西南戦争を未然に防ぐために明治政府（大久保利通、松方正義）の密命を受けて西郷に面談した、という話も伝わっている。松方正義が初代日田県知事であったことを考えると、あり得ない話ではない。

しかし、西南戦争勃発直前の緊迫した状況の鹿児島で、五岳が実際に西郷隆盛と面会できたとは考えにくい。たとえ西郷本人が了解したとしても、まわりの取り巻きが認めなかっただろう。肖像画の西郷が身につけている島津家の家紋の入った羽織は、島津家から拝領したものと考えられる。そして、西郷の遺品の中に同じものが存在し、現在は西郷南洲顕彰館に展示されている。

ところが、藩を代表して活躍した幕末期ならばともかく、明治9年の段階では、島津家の紋章の入った羽織を着て外部の人間に会うという事はあり得ないだろう。

なお、肖像画の上部には、次のような漢詩が書かれている。

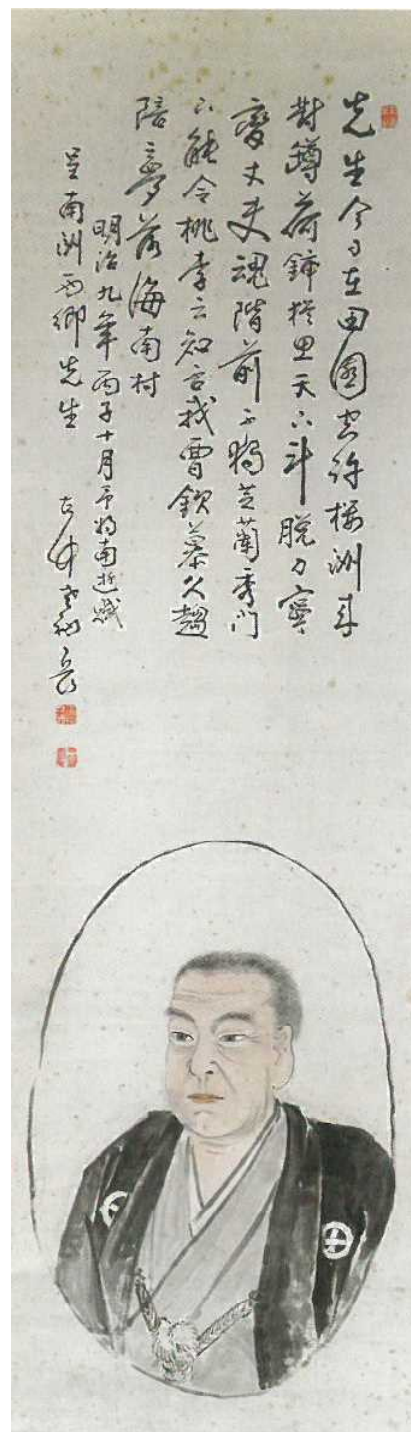
先生今日在田園	空許桜洲来対罇
荷鋤猶思天下計	脱刀寧変丈夫魂
階前不独芝蘭秀	門下能令桃李言
知否我曾欽慕久	趨陪夢落海南村
明治九年丙子十月予将南遊賦	
呈西郷南洲先生	古竹老衲岳

西郷との面会を希求する五岳の思いが詠われており、特に最後の「知否我曾欽慕久 趨陪夢落海南村」（ご存じでしょうか私はずっと以前からあなた様をお慕い申し上げていることを。

気ははやり走っておそばに参じたいと思ひ、夢はすでにお住まいの村に着いております。）の部分から、五岳がいかに西郷のことを尊敬していたかが読み取れよう。

ただし、この詩から察すると西郷のいる鹿児島までは足を運んだものの、実際には面会できなかったと考えるのが自然だろう。したがって、本肖像画は五岳が敬愛する西郷のイメージを描いたもの位置付けることができよう。ギラギラしたところが全くなく、悟りの境地に至った儒者を連想するような西郷像である。作風的にもキヨソネの描いた肖像画の影響を全く受けていない。

なお、この肖像画は、平成15年に筆者が担当した黎明館開館20周年記念特別展「激動の明治維新」に特別出品していただき、鹿児島で初公開された。



「平野五岳筆西郷隆盛肖像画」
川津家蔵

終わりに

明治維新150周年の区切りの年のNHK大河ドラマは「西郷どん」であった。明治維新では多くの志士たちがそれぞれの立場で命がけで活躍したにもかかわらず、一人の人物を通して明治維新を見ていくとなると、やはり西郷隆盛をおいて他にはいなかったのであろう。没後140年以上経つ今日でも、多くの人が西郷さんに関心を寄せており、西郷さんこそ明治維新の一番の立役者と認識しているということである。

かつて、徳富蘇峰は西郷隆盛没後50年記念講演会において、「南洲翁を慕う心が国民にある間は日本はまだ大丈夫である。これが無くなる時には国が亡びる時」と述べた。もうしばらくは日本も大丈夫そうである。

[参考文献]

- 『敬天愛人』(西郷南洲顕彰会)
- 「月報」(『西郷隆盛全集』付録, 西郷隆盛全集編集委員会)
- 『南洲精神をさぐる 西郷隆盛と西南戦争』展示図録(鹿児島県歴史資料センター黎明館)
- 『西郷隆盛と大久保利通』展示図録(鹿児島県歴史資料センター黎明館)
- 『お雇い外国人キョソナーネ研究』(明治美術学会/印刷局朝陽会)
- 『薩藩画人伝備考』(井上良吉著)
- 『黎明館収蔵品選集』(鹿児島県歴史資料センター黎明館)
- 『鹿児島市立美術館所蔵作品選集』(鹿児島市立美術館)
- 『20世紀回顧・鹿児島と洋画展』展示図録(鹿児島市立美術館)
- 『日本洋画の夜明け 鹿児島ゆかりの画家たち』展示図録(鹿児島市立美術館)
- 『描かれた西郷どん展』展示図録(かごしま近代文学館)

※ 本稿で紹介した西郷隆盛肖像画は、全て所蔵者の許可を得て掲載しております。
無断転載(コピー)はできませんのでご注意ください。